

日本現代文學全集 85

伊藤 高見
整 順
集

講談社

日本現代文學全集

85

伊藤 整・高見 順集

編 集

伊 藤 整
龜 井 勝 一 郎
中 村 光 夫
平 野 謙
山 本 健 吉

初版 第1刷

昭和38年6月19日

増補改訂版 第1刷

昭和55年5月26日

著 者 伊 藤 整
高 見 順

装 幀 蟹 江 征 治

發 行 者 野 間 省 一

發 行 所 株式會社 講 談 社

印 刷 大日本印刷株式會社
製 本 株式會社若林製本工場

東京都文京區音羽 2-12-21

郵便 番 號 1 1 2

電話東京03 (945) 1111(大代表)

振 替 東 京 8 - 3 9 3 0

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします

Printed in Japan

0395-106854-2253 (2)

(文1)

伊藤 整集 目次

筆蹟

馬喰の果て	五
破綻	一八
幽鬼の街	三
生きる怖れ	六
火の鳥	八
藝による認識	一九
近代日本人の發想の諸形式	二六
組織と人間	三〇
雪明りの路(抄)	三五

冬夜(抄) 三三

作品解説	平野 謙	四四
伊藤整入門	佐々木基一	四五
年譜		四六
参考文献		四七

高見順集 目次

筆蹟

虚實……………三七

ノーカナのこと……………三八

インテリゲンチア……………三九

あるリベラリスト……………四〇

甘い土……………四一

生命の樹……………四二

描寫のうしろに寝てゐられない……………四三

文學非力説……………四四

社會科學者への提言……………四五

商品としての誠實について……………四六

樹木派（抄）……………四七

わが埋葬（抄）……………四八

作品解説……………平野 謙 四九

高見順入門……………佐々木基一 五〇

年譜……………四一

参考文献……………四二

伊
藤
整
集

白く翔る

波の穂を越え

て漂子拾見

作 藤 正

馬喰の果て

一

準平は鈴木三太のために、往還の泥のなかへしたたかに投げつけられた。この數日、降つては消えてゐた雪で、水飴のやうに光つてゐたその泥のなかへであつた。しまつた、と思つたときには準平の掌は、泥の底のざらざらする砂利を撫でてゐた。這ひつくばつたその恰好で、準平は身體の深いところからじんと怒りの湧いてくるのを感じた。だが酔つてゐたせゐで、起き上らうとする自分の動作が妙にのろのろと、思ひのままにならなかつた。糞つ、と思ひ、彼はそのまま泥のなかへ坐り込んで、自分の眼の前に立ちはだかつたまま、はつはつと息をついてゐる鈴木をじろりと見上げた。

「へつ、やりやがつたな」と言つて彼はにたりと笑つてみせたが、怒りは激しい波のやうに彼の全身に擴がつて行つた。やがてそれは白熱して透きとほるやうなかつたとなつてゐながら物の姿が明確に寫つてくる落ちつきに變つて行つた。これは幾度も経験によつて彼が知つてゐる「本氣」の状態であつた。その中へ入つてしまふと、彼は怖いものがなくなつてしまふのだつた。卑怯なこと、汚いこと、何でも構はない、息のある限りはやつて見せるぞ、といふ氣持であつた。さうすると彼は、さあ俺の張りに向つて來れるか、と兩肩の間へ落すやうにした顔の頸をつき出して、齒をむき、鈴木の大きな身體をじろりと睨みまはした。

身體がしゃんと思ふと低りに動かないのだけが氣がかりであつた。立ち上つたら上背のある鈴木に投げられるぞとは思つた。だが、喧嘩の勝負は決して投げるか投げられるかにないことを彼は承知してゐた。どこまでも、つまり生命の瀬戸際までやりとほす氣でゐるといふことを相手に感づかせて尻こみさせるといふのが準平のいつもの手であつた。殴られることや投げられることは非力な準平にとつてはたいいていの場合避けられないことだつた。ただそれを手際よくやつてのけて、早く相手に手を引かせるやうにしなければならぬのだが、と見はかつてゐたが、自分ではまだと思つてゐるうちに、どうしたのか準平はひよいと立ちあがつてしまつた。

「やるか。小生意氣な眞似をしやがつて」とそこで彼は言つたものだ。ずつと遠くにあるやうな手足を突つ張つてみたが、どうなるかと氣を吞んで立つてゐる鈴木の前で、準平はあつちへよろけこつちへよろけして奴隷のやうにふらつくのだつた。おや俺は酔つたふりをしてるんぢやないか、結局これで手荒い眼に遭はずにすむかもしれないぞ、と思つたが、そのまま彼は鈴木に腰のあたりへ蟹のやうな宙ぶらりんな恰好でしがみついた。無尻外套を着た鈴木に腰のあたりは無闇に大きいばかりで握まりどころがなかつた。こいつは、と思つた途端に準平の身體はふはりと空に浮き、古着の塊のやうにばさつと泥のなかへまた投げ出された。

場所は小料理屋のつたやの前であつた。ちやうど程近い停車場で隣の町から列車を下りた勤人や學生の一團が來かかつて、この喧嘩を氣味悪さうに遠巻きに見てゐた。仲裁を買つて出さうな柄の人間がないので、このまま放つておいたら生命のやりとりになるのではないかといふやうな氣持で皆は立ち竦んだ。赤けつとの下ごしらへの上にサクリを着込んだ準平は、泥の中ではねかへつた魚のやうにもう全身どろどろになり、唇が切れたらしく頸のあたりにべつとりと血がついてゐた。三度四度と立ち上つては鈴木にぶつかつてゆくのだが、やがて酔ひでなく疲勞と打撲のために準平がいよいよひよ

ろついてゆくのに反して、鈴木は身體がきまつて來て、その準平をただ掴まへては投げつけてゐるのであつた。もう興奮が去つて、鈴木顔には次第に當惑の色が浮んできた。

やつと彼は、村中の持てあまし者にかかづらはつてゐることが不安になつて來た。この吹けば飛ぶやうな酔つばらひの準平を、觸らないやうに觸らないやうにと村のものが煙たがつてゐる理由を、彼はいま、これだなど思ひあたるのであつた。準平の眼はますます据つて、もうへとへとになつてゐるに拘らず、泥をかきまはす犬のやうな恰好で四つん這ひになつては鈴木木の下長靴へしがみついて、どうしても離れないのであつた。そして「この野郎」「糞つ」と言つて、彼がその足を抜かうとすれば、そのままずると泥の中を引きずられて來るのだ。

事の起りは、鈴木が貨物二臺分の鰻うなぎを送るための石油箱がついたので、驛前の運送店へ運賃支拂ひに行つたが、話が行きちがつてどうにもならず、むかつ腹で歸つて來る途中、準平が海岸の方から酔つぱらつてやつて來るのに逢つたのだが、その時はちやうど小學校のひけ時らしく十歳位の女の子が五六人準平を怖がつて家の軒下へ逃げ込んだのである。赤い爪草の足駄を深い泥にとられて逃げ遅れた一人の女の子が、準平のやつてくる眞前に立ちすくんだまま「おつかねえ、おつかねえ」と泣き叫んでゐた。その前に立ち止つた準平は、蛙や毛蟲を見つけた犬のやうなもの珍しげな醉顔で、母親に甘やかされて育つたらしい女の子の丸顔を見まもつてゐたが、再び女の子が「あばあ、おつかねえ——」と絶叫すると、怖がられてゐるのが自分だと見てとり、ふいとさういふ自分に對する自棄的な心が働いたのか、よしやがれ、と言ふやうにその子を押しつけたのである。女の子はぬかるみに膝をついて「ああつ」といふはげしい泣き聲を立てたやうであつた。

そのとき「この野郎」といふ聲が耳のはたですると同時に、がんといふ鈴木木頭打ちが後ろから準平の右頬へ來たのである。こい

つに何の權利があつて村中をのさばりかへつてゐやがるのかといふ腹で、鈴木は準平の扁平な肩を掴むとぐいと自分の方へ向けなほした。たかが渡り者の馬喰で、ひとつまみにもできるやうな身體の準平を、なぜ皆が憚つてゐるのか、そしてまた準平の方でもそれをいいことにして、村の稼人どもを自分の手下かなにかのやうに周圍に集めてゐるのが、前から鈴木は氣に食はなかつたのである。この村へ來た初めにはそれでも赤つちやけた駄馬の一匹位は絶えず持つてゐて、それに乗つては近い村々の百姓の處をまはつて馬をとりかへたり、どこからともなく種馬をつれて來てかけ合せたりして暮してゐたのだが、いつか元手も無くしたと見えて、なみの稼人仲間に入り、鰻網や鰻場の雇をして村に落ちついてしまつたのである。準平の身についてゐる訛りのない言葉と妙な人を鼻先であしらふやうな態度と、あいつは人殺しぐらい何とも思つてやしない風説を尤もらしく思はせる、何處となく不敵な面魂と、酒癖の惡さとが、皆の彼に一目おくやうになつた理由であつた。どつちかと言へば村では親方衆の側に立つて平の稼人を見下してゐた仲買の鈴木は、さういふ準平が初つから何となくうるさいのであつた。それに去年の春、髭田の親方が九一を全廢して前借の金額で手加減するといふ案を雇一同に申し渡した時、雇側の總代になつた準平は、親方の代理といふ役を買つて出た鈴木を出しぬいて、深夜酔つた勢ひで直接親方を妾宅につかまへて談じ込み、結局長年の慣例どほりといふことに結着させた事件があつた。

自分に平手打を喰はしたのがその鈴木だと解ると準平の顔には、はあ、といふ一種の表情が浮び出た。鈴木はそれを見てぎくりとしたのだ。といふのはうっかり忘れてゐた九一問題のことをその準平の表情が彼に思ひ出させたのである。おや、と思つたときは、でく人形のやうに自分の中ががらん胴になつてゐるやうな氣持であつた。自分の考へることが身體の隅には行き届いてゐなかつたといふ頼りなさであつた。一つ敵られると、赤黒く酒と陽に焼けた準平の

つぶれたやうな皺だらけの顔が、酔つてはゐるもののもう本能的な身構へをしてゐて、さあどうでもいいから好きなやうに扱つてみると、だらりと垂れさがつた臉の下から濁つた眼でじろりと見てゐるのに逢つたときは、鈴木も背中を水が走るやうな戦きを覺えたが、そこでかあつとなつた後はもう夢中で準平を投げてゐたのである。からみついた準平を、ぐんと蹴とばすやうにして、やつと足を抜き、一間ほどそこから離れて身構へた鈴木に向つて、準平はそのまゝ泥のなかに胡坐をかいて呷鳴りはじめた。

「やい鈴木、俺の言ふことをよく覺えとけ。男の喧嘩はな、生命のやりとりなんだ。今日のところあ酔つてたから手前の好きなやうにさせておいたが、いよいよ喧嘩となつたからにや、俺はどこまでもやるんだからな。とにかく準平は相手の息の根をとめるか、どうか勘辨してくれと手をついてあやまらせるかのどつちかになるまで今迄やつて來た男なんだ。俺はいい加減な所で物別れになるのは嫌ひなんだ。今度逢つた時は手前をそのままちや置かねえぞ。いいか、承知したか。それが怖けりや今、俺をやつつけてしまふがいい。やるなら今のうちだぜ。さあ今のうちにどうでもしる。でなけりや手前の方が危ねえぞ。」

準平はまたのろのろと立ち上つて鈴木に武者ぶりついた。いい加減不安になつてきた鈴木にはこの男の爬蟲類のやうなあくどい奇妙なねばり強さがこたへて來て、ひよろひよろの準平に押されるままに棒立ちになつて一步二歩後へさがるやうにした。その途端に鈴木はもう引きあげようと考へついたのである。彼は準平の兩腕をつかんでぐいと自分から離した。

「おい準平、あんまり酔つばらつた風するな。酒は手前の稼ぎで飲むものだすけ構はねえども、學校子供にまで惡戯するのはやめだ方がええぞ。酔つて手前を投げだな悪戯がつたども、ちつとは性根もあるもんだ。あんまり身勝手なごどばかりで世間は渡れねえぞ。手前の言ふごどはもう解つた。もう歸れ。ん？　もう歸つた方がい

い。解つた。解つた。」

そして彼は足早に貝殻小路の方へ歩き去つた。無尻外套をぬくぬくと着込んだ鈴木の大きな後姿は立派であつた。準平に背を向けるとともに、このままでは濟むまいといふ危惧の念は一層鈴木のなかで強くなつてきた。準平が兇狀持ちで何處で誰を斬つたといふ話もはつきりした事は全く解らないのであつたが、とにかく關東地方から南部、函館から日高と流れてきた準平には、鈴木の推し測られないやうな暗い面があるやうであつた。それに今では大分少くなつてゐるとは言ふものの、内地に住めなくなつて流れて來た手も足もつけられないこの種の破落戸についての傳説は、まだ北海道のこの地方には英雄譚のやうにして幾つも語り傳へられてゐるのであつた。準平の持つてゐる人氣には多分にさういふ傳説の再現といふ意味があつたのである。あいつ、この次に逢つたときには刃物でも呑んでくるつもりであるのか、と鈴木はちらと考へた。後の方から準平のたんかを切るのが聞えた。

「やい鈴木、たうとう逃げ出しやがつたな。おい戻つて來やがれ、喧嘩はこれからだぜ。貴様が逃げ出しやがつたつて、準平はな、賣られた喧嘩がこれで片づいたものとはちつとも思ひやしないぞ。よく覺えとけ。準平は喧嘩の續きをやりに出かけるぜ。おい鈴木三太、そのときになつて慌てるな。やい、だいたい貴様は卑怯だぞ。負けたのなら戻つてきて手をついて謝れ。きつとこのままちや濟まされえからな。後になつて吠え面をかくな。準平を誰だと思つてやがるんだ。南部から日高にかけて、沼田準平と言ひや、さつものだつて側を向いて通つた程の馬喰だ。へつ、この片田舎で筵買ひをして親方衆の鼻息を窺つてゐるやうな鈴木三太ぐれえに威かされて、黙つて引つ込んでゐられるか。歸れだと、何が歸れだ。尻尾を捲いた者の方から先に歸るもんだ。それが嘘なら戻つて來てみる。へん、沼田準平がな、沼田準平がどんな人間か、いまに思ひ知らしてやるぞ。」

準平は鈴木が床屋の角を曲つて見えなくなつても駄鳴り續けてゐた。立ち止つてこの騒ぎを見てゐた連中も、一人きりになつた準平の眼で睨まれる不氣味さに何時か散りぢりになつて行つた。戸を閉め切つた兩側の柵葺きの平屋の間に、ぬかるみの道がだだつ廣く盛りあがつて居り、暗くなつて來た低い空からは蛾のやうな大きな雪片がふはふはと舞ひ下りて泥に吸はれてゐた。兩側の家のなかにゐる人々は、ひつそりと鳴りを鎮めて準平のせりふを聞いてゐるやうに思はれた。駄菓子屋の角長の硝子戸は破れた一枚だけ相變らず板でぶつつけてあつた。長次の家の軒下には乾大根でも吊した後らしく鼠の尻尾のやうな縄切れがぶらぶらと揺れてゐた。準平は自分になすりつけられたこの汚辱の原因が、このみじめな村全部にあるやうな氣がするのであつた。誰でもいいから出て來てみる、といつた調子であたり一杯にわめき散らし、半分カアテンを引いたまま五寸ほど戸をあけてゐる禿床の店さきを、自分を莫^ば迦^かにしてゐる者のやうに睨みつけてゐた。

雪はますますひどく降つて來て、背中から裾一面泥まみれになつた準平のサクリに、ちらちらした細かい粉になつて引つ掛つた。べつと唾をすると、口のなかから赤い血の塊が飛んで行つて泥にささつた。睫毛の雪を拂はうとして顔を撫でると、血と泥が一緒になつて、ぬらぬらと掌について來た。その掌をそのまま帯の間へ突込んで立たうとすると、腰ががつくりと崩れさうで、鈴木にはとても敵^{かた}ひさうもないぞ、といふ反省が準平の心をかすめた。だが俺も口先ばかりでなく、本當に村の奴等をびつくりさせるやうな派手な仕返しをあいづにしてやれたらと思ふと、頭から全身がかつと痺れるやうな感動が湧いて來て、それを喜びのやうに準平はかみしめてみるのであつた。

二

高澤雜貨店の女房のお園と準平は山多の主人が死んだ通夜^{つうや}の歸り

に一緒になつた。山多を十二時頃に出たときは四五人連れであつたが、途中で近い人からぼつぽつ缺けて行つて海岸通りから山手の方へまがつたときは二人きりになつたのである。からからに凍つた地面には雪がうすく降つてゐるきりなので、足駄の齒はひどく不安定であつた。夕方から風が落ちたのに、納屋のかげで海はまだたけり立つた怪物のやうに吠えてゐた。凍つて硝子のやうに張つてゐる空氣がぐんぐんと波の音に押されてゐるやうであつた。兩側の家並は、嵐がきても吹き飛ばされぬやうに地面にしっかりと立つてゐるのだが、そのムジリ姿は、熊が檻のなかを歩きまはるときのやうにぎごちなかつた。歩くためにでなく、獲物を狙ふやうに身體が出來てゐるといふ感じであつた。それはお園が長年見なれてきた漁師の身のこなしと全くちがつたものであつた。

だから、もともと馬喰で苦勞して來た準平が、今では元手になる駄馬の頭も持つてゐずに、この村でも年末に困つてゐる連中だけで始めてゐる危険な罽網に出てゐたつて、思はしい稼ぎにならないのも當然な譯だ、とお園はお妙にせがまれて用立てである二十圓ばかりの金のことを思ひ出してゐた。

準平の女房のお妙が、この村では資産家に數へられてゐる高澤雜貨店の女房のお園と従姉妹^{じゆわい}であることが解つたのは、準平夫婦がこの村へ來て二三年経つてからであつた。十歳位まで松前の福島で隣同士に住んでゐたのだつたが、お妙は函館へ子守に出されてから、室蘭、小樽と流れて歩き、小樽で牛肉屋の女中をしてゐたとき準平と一緒になつたのである。この姻戚關係のために準平夫婦は色々なことで高澤家の厄介になるやうになつた。お園は先月お妙に貸した無盡の金のことを考へてゐた。準平はその金のことを知つてゐるのかもしれなかつた。さうも思つたけれども、準平に逢ふたびにお園は彼が自分の身體のことを考へてゐるやうな氣がしてならないのであつた。今もそのために不安に襲はれてゐるのだが、それはあるひ

はお園の方だけで感じてゐることで、準平にさういふ考へはないのかも知れなかつた。お園は店に坐つてゐるとき、客が来て立ち上つたり、棚から物を卸さうと腕をのびしたりする度に、自分の膝や腰のあたり、袖口なんかをじろりと見られる視線を感じてゐた。それは手で撫でられるやうな觸感を彼女に與へた。また自分の身體にもさういふときにはきつと或るしなが現はれてゐた。それに彼女は美人だと言はれてゐたし、風呂のなかでもうつとりと白い自分の肢體をながめてゐることがあつた。

だが準平に對つてゐるときに感ずるものは何か特別なものだ。外の男たちはお園を見て空想してゐるにきまつてゐたし、お園の方でもさういふ淫らな物思ひの世界で、それとなく一緒につき合つてゐたつていいのであつた。それはうねうねとくね曲つて進んでゆくだけで、現實の問題になつて愕然と覺めるといふ危険は全く無いものであつた。準平は別に彼女の身體をじろりと見てゐるといふやうなことはしなかつたけれども、身體全體で待ちかまへるやうに彼女の肉體を感じ取つてゐるやうだつた。準平のそれは想像の方へ流れてゆかずに、一氣に飛びかかつて來る動物の本能のやうなものであつた。外の人間がゐるところでも、準平が彼女のそばへ寄つて來るやうなことがあると、お園は今にも肩をぐいと掴まれるのではないかと、と思ふのであつた。準平が魚などを高澤家に持つて來ると、それを下げたままづかづかと茶の間をどぼつて臺所の流しへばさりと魚を投げ出すのだが、さういふ時には準平が彼女の傍をどぼりすぎたまで、お園ははつと息を呑んでゐるのだ。この人の何時ものやりかたで、お園ははつと自分に言ひきかせてみても、それは無事にすぎたと胸を撫でおろす安堵になるだけであつた。そしてその次はまた同じなのだ。

それに最近準平が仲買の鈴木と喧嘩をしたといふ噂は村中の評判であつた。その場の様子を見たものの、はつきりとした證言があるにも拘らず、噂ではやつぱり準平に勝負があることになつてゐた。

命知らずにかかつてはしやうがない、といふのが皆の頭に浮ぶ言葉であつた。噂によれば、あの事件があつて數日後に、準平と鈴木は、夕方入丁の納屋の裏の方でびたりと顔を合せたさうである。兩方とも思ひがけないことであつたが、その日は準平は酔つてゐず、ちやうど網を繕ふために小刀を腰前にぶら下げてゐたのだが、鈴木はみるみる顔色が眞蒼になり、こなひだはどうも自分も酔つてゐたことで全く申しわけがないと鄭重にあやまつたさうである。準平はまるで馬の品定めでもするやうに、珍しげに鈴木を見まもつてゐたが、突然、いや、と言ふなりそつぽを向いて鈴木の手にならなかつた、といふのである。いややつぱり準平には手出しができない、といふ評判がもう村の人から人へ言ひ傳へられてゐたのだつた。だがお園は、準平が村の收税吏員を川のなかへ叩き込んだり、仲買と喧嘩するのも、樂なところだけで仕事をしてゐるので、自分の處だとか親方衆のあたりは、普通の人間に氣のつかない程大事にしてゐることは知つてゐる、といふ氣持だつた。鈴木のことなんか、どうせ鈴木といふのが中途半端な人間で、他人の手形の融通や間屋筋の賣込みや支拂の交渉などを引き受けて、あやふやな生活をしてゐるに過ぎぬ人間なのだから、取りやうによつては村の人氣を攫ひには恰好の相手を選んだものだと言へる、とも思ふのであつた。準平が決して外から見えるやうな粗暴な人間ではなく、女房の借りた金のことに知らない振りをするやうな油斷のならない狡猾な所がある、とお園は考へてゐた。だから準平が自分に對して抱いてゐる興味をどういふ風にして實行に移すかといふことを絶えず考へてゐた。しまひにはその空想の不氣味さが一種の手應へともなり、なにか樂しみを待つてゐるやうでもあつた。

準平の後について歩いてゐながら彼女は妙にせかせかとして遅れまいと骨を折つてゐた。ある家の前には白い雪の上に草鞋の跡があつて魚籃が二つ戸の前に置かれてあつたが、それはたつた今誰かがその家へ入つたばかりの所らしかつた。お園はそこでふいと恥しい

氣持になつた。何となく自分が準平に寄り添ふやうにして歩いてゐたやうに思はれた。その家は話聲も聞えず、眠つたやうに静まりかへつてゐた。どうしたのかお園は、お妙の顔を思ひ出した。髪をぼうばうにして胸をはだけたまま白い襟元をひろげてゐるのだつた。子供もないのにいつも疲れた寢不足の顔をして、眼だけが黒く光つてゐるであつた。お園にはお妙の身體の具合が手にとるやうによく解るのであつた。その肉體の疲勞は、いま寢床から起き上つて來たもののそれであつた。お妙の身體が經驗してきた酔ひも疲れも物憂さも、皆自分自身の經驗のやうにお園の身體に應へた。お妙はさういふ肉感的な女であつたが、彼女のやうな崩れた所をちつとも見せぬ準平の憎々しい態度のことを考へると、お園は何やら見當のつかないものにぶつかつたやうに、準平といふ男は、一體、と思ひめぐらしたりして、はつと自分にきつい顔をして見せるのだつた。高澤が何もない平凡な男のやうに見えることがあつた。だが準平は自分になんか全然興味を持つてゐない、とお園は、今ふいとさう思ひ、お妙の荒んだ顔をまざまざと思ひ描いた。

道は小川にかかつた木橋を越して、急に北風のアたる所へ出たせゐか、風が着物の隙間から吹き込んで來て、彼女の裾が開いた。兩手で角巻を押へるやうにしてゐたために、お園は風に向つてくるりと後を向き、それから左の方へ向き直らうとした。準平が二歩ばかり先で後を向いて待つてゐた。

「なんか落したのかね？」と準平が言つた。

「いいえ」と答へたが、その返事は我ながら弱々しい張りのないものだつた。まるで自分の思つてゐたことを全部相手に悟らせたいやうな受身の調子だつた。すると準平はそのまじつとお園の顔を覗き込むやうにした。彼女は我にもあらず、たじたじと二三歩退いた。にたりと笑つたやうに準平の顔に齒が光つたが、今度はくるりと向うをむいて歩き出した。お園はどきんとして立つてゐたが、遅れるとどんなことになるかもしれないと思ひ、五歩ばかり後からまたせ

かせかと歩いて行つた。風は冷たくつて頬に痛いやうであり、眼には涙とは違ふただの水のやうなものが浮いて來て鼻の方へ落ち込むのだつた。彼女はもうすつかり準平に見てとられたと思つた。どうにでもなれといふ一種のかあつとした氣持になつたが、さういふ破滅をもう長いあひだ覺悟してゐたやうな氣もした。

路のすぐ傍に共同井戸があつて、湧水の音がちろちろとしてゐた。そこを通りすぎ、その音が消えるあひだ、お園は待ちかまへてゐた。だが準平は相かはらずのつそりと歩いてゐた。高澤の家はすぐその向うに板塀をめぐらしてあつた。それが眼に入るとお園は深い水の底からでも浮き上るやうに、いつもの自分に戻つて來た。それはまるで目眩ひを覺えるやうな激しい現實への目覺めであつた。ほうつと溜息が出て、どこか物足りないやうな、自分の莫迦な夢想をあはれむやうな安心であつた。自分はちゃんとした高澤家の内儀であり、準平は金を借りてゐる馬喰崩れでしかなかつた。少し先に歩いてゐる準平に言葉もかけずお園は潜りに手をかけた。下女が閉めたのか鍵が下りてゐたので、側に下つてゐる紐を引いた。奥の方でりんと鳴つてゐるのが聞えた。

「お内儀さん」とすぐ耳の傍で、準平の聲がした。見るといつの間にか準平がびたりと彼女に寄り添ふやうにして立つてゐた。はつとしたが、金のことだな、とすぐ思ひ直した。すると、準平の右手が角巻の裾から着物の合せ目を通してお園の皮膚をさぐつた。左手はお園の肩を押さへて動かさなかつた。どうしたのか自分でも解らないまま、彼女はじつと準平のするにまかせてゐた。臺所の戸ががらがらつと開けられて下駄の音が近づいて來た。お園は準平の手を機械的に自分の身體からふりほどくと、ちやうど開けられた潜り一杯に立ちはだかるやうに下女の眼の前へ出てゆき、ばたんとそれを閉めた。塀の外に準平はじつと足音もさせずに立つてゐた。下女を先に寝せて戸締りをしながら彼女はじつと耳を澄ませ、雪を軋らせてそつと立ち去る準平の足音をはかつてゐた。

茶の間で、きゆつきゆつと帶をといてゐるとき、彼女はさつきちつとも抵抗しなかつたのは、慌てたり騒いだりして混亂したところを見せたくなかつたからなのだ、とそれでも自分に言ひきかせてゐた。だが自分が準平の手を掴んで離れたときの動作は、下女が来るから今はよせ、といふだけのことになつてゐない。それは拒絶とは言へない。この次の機會にはもう自分は何も拒めなくなつてゐる、といふことがお園に解つて來た。

三

珍しく數日からりと晴れた日が續いた。家の北側にすこしは積んだ雪も、春先のやうな騒々しい風に融けてからからに乾いてしまつた。久保山の庭先にはがやがやと人だかりがして、黒馬が一頭その真中に引かれてゐた。準平が久保山の親方に見せるために隣の馬喰のところから連れて來たのである。今練場の仕込みを前にして久保山では金に餘裕がある譯ではなかつたが、鐵道線路の傍の落葉松が二十年ばかりで伐り頃になつてゐたのを二町歩ほど手離して、網、綱具、船の手入れから、雇ひの前貸し、米、味噌、薪と一とほりの掛りはどうにか間に合ふ見當がついたのである。借金は借金として三四千圓ほど残つてゐたが、走りの鯁を生で賣り出せば利上げはどうにかなる筈であつた。數年續いた不漁の中で珍しいことにのんびりした氣持を親方は味はつてゐたのである。

ある日親方が鯁網歸りの準平との雑談に、ふと馬の話から、以前四頭ほど馬を置いた厩舎の空いてゐるのを思ひ出して、一頭ぐらゐ置いてもいいんだがと、うつかり口を滑らしたのである。前の四頭も手許がつまつて人に譲つたのだが、少しばかり當座預金がある、それが全部使ひ途のはつきりとした金で餘裕はないにも拘らず、毎年續いて二千石も漁のあつた頃のやうな大様な氣にふいとなるのであつた。準平の話では、いい馬でもあればだが、つまらぬ馬なら金を棄てるやうなものですよ、とあまり氣乗りもしてゐないら

しかつた。もともと親方も本氣ではなかつたのである。ただどうかすると此の頃は組合をつくらうとしたり、村會に雇ひ側の代表者を出さうなんて騒いでゐる村の下々の連中の間で妙な人氣を持つてゐる準平に、お愛想を言つた位のつもりであつたのだ。それに走りの生鯁の値でも少しよければ銀行の方の利上げをして漁期の後半位の米はその時になつてどうにでも工面がつく、といふ肚もあつた。

親方の方ではそんなことを忘れてしまつてゐたのに、今朝突然準平が勢よく馬を乗りつけ、馬上で手綱をぐいと引きしぼつて、庭先の軟い土にぽかぽか穴をあけながら乗り廻してから飛び下り、親方にこの馬を見てもらひたいと言ふのであつた。氣に入らないと言つて突つばなすばかりだと思つてゐたので、親方は幅の廣い顔のずんぐりした身體を縁側に現はして來た。見たところ首や手足の太い力のありさうな馬であつたが、前に置いてゐたのがこの地方の草競馬には出せる馬で自分でもよく乗りまはしてゐた親方は、こんな馬車馬なんかのことは考へてゐなかつたのである。

「ふむ、馬車馬だな」と親方は言つたが、手綱をとつて後向きになつてゐた準平には聞えないやうであつた。馬車馬をほしかつたのぢやないと言つたら、また次から次と別の馬を持つて來るだらうと、荒立てずに斷ることを考へてゐた。準平は、ちやうど町の伍助のところへ行つた時見せられたので、ある荷馬車屋から出されてゐた馬で、四歳だとのことであつた。元値の安いことを準平が知つてゐるものだから、伍助は癪が強すぎるとか、右の後脚に疵があるとか言つて渡したがらないのを無理に持つて來たのだ、と聲高に言ふ準平にはどこか威丈高で相手に食つてかかるやうなところがあつた。

「この處なんだがね」と準平は馬の腹の下に突込んだ頭を曲げて、ものを探るやうなじろりとした眼で親方を見上げ、關節のすぐ上の筋肉に沿つた縦の疵痕を指で摘んでみせるのであつた。

「蹟いて石か何かで切つたものにちがひないんだが、伍助のやつこつちに諦めさせようとしやがつて、何だのかだのと吐かしやがるん

だ、これが骨に届いた疵かどうか俺に解らねえと思つてやがるんださ。」と言つて準平は轡をとつてとつと圖を描いて馬を引きまはした。見物の雇や近所の女子供の輪がばつと大きくなつた。別に跛を引くといふやうすもなかつた。

「何でも二頭持つてゐた荷馬車屋だつたさうだが、亭主が死んだあと女房が早く始末して國へ歸るといふので、伍助は二束三文で手に入れたらしいんだ。何にせ額は少くつても、あいつ自分の懐をいためた金なんで、年末を控へて樂でもなささうだから、あいつに三十兩ばかりも儲けさせてやつてくれりやあいんですよ。親方、こいつあすぐ手放しても金儲けになりますぜ。來春の鯨場に使つてから賣れあ、いい若い者二人位の前借高が浮くのは請け合ひですよ。その時にやまたこの準平が何しますが、どうです。道樂にやならねえが、金儲けですよ。準平も長年叩き込んだ馬を見る眼にやまだ狂ひはねえつもりなんだ。こいつあ使ひでのある馬ですぜ。かういふ機でもなければ、度々世話になつた親方の役に立つこともあるまいと思つて、何でも構はんから一日だけ貸せ、これからもずつと最前にしてもらへる筋なんだからと言つて無理矢理に持つて來たんださ。」

準平は親方のすぐ傍へ腰かけて脚を組んだ。いつもどことなくぐうたらな準平の身體全體が、その恰好のまましやんと据つて見えるのであつた。親方は値段のことをどうかうと言ひもしなければ、馬についての自分の意見を述べもしなかつた。雇人に對する時や商人を扱ふいつもの態度で、下手に自分の方から物を言ひ出して相手に乗ぜられないやり方であつたが、事實準平の説明はちやんと親方の考へが動く先々を押へて行つてゐるので、親方の方で切り出す話題もなかつたのである。こいつは下手をすると恩にきせられながらこの馬を掴まされるぞ、と思つた。何だつて又こんな馬のことを言ひ出したのか。だが馬はどう見てもなかなか立派なものだつた。準平の奴、仲々やるぞ、と彼は思つたのである。年内はとも駄目だ、

と簡単に突つ放せばいいんだと、と考へて、ふと、待てよ、金に困つてその馬喰が手放すのなら損をする氣遣ひもない譯だが、と思案しかけて、準平の奴がこれでうまい正月酒を飲むわけか、などと思ひかへして、親方はにたりと笑ひ、「さうさなあ。準平、俺は馬車馬は欲しいわけではないんだが。鯨場でもあれば遊ばせでおかねばならねえし、久保山あ馬車馬の賣買をしたつてえ噂も有難くねえしな。」

「親方、さうあつさりと逃げられちやこなひだからの俺の骨折りも無駄になる。折角こゝまで話を持つて來たんだから、まあ見るだけでも見てやつて下さい。こいつあ金にしようと思ひやすぐにだつて相當の値で賣れるんだ。親方だつてずぶの素人ぢやねえんだからその邊の見當はついてゐるだらうが、まあ念のためひとつ走らせてみようかな。おいどけ。莫迦め、曲馬ぢやねえぞ。何だつてうろろ人のあとをついてまはりやがるんだ。蹴殺させるぜ。邪魔だ」と準平は縁側から下りるなりきびしい顔であたりの者を唳鳴りちらした。

儲けのことも勿論あつたが、少し懷の溫い久保山が馬をとうっかり言つたときから、準平は忘れてゐた大變なことを思ひ出したやうに馬への熱中をとり戻したのである。損得の問題を越えて自分自身の全力をうち込める仕事としての馬喰商賣は、骨の髄から彼を造つてゐるやうなものであつた。どうせ馬で儲けた金はお前さんが飲んでしまふだけだから、と女房のお妙が不平さうに言ふのを聞き流して、準平は幾日も鯨網にも出ずに心當りを歩きまはつてゐた。これと思ふ馬を見つくるまで、彼は憑かれた人間のやうになつてゐた。だからいま久保山の庭先で見物人を唳鳴つたのも、いつも客の前で外の人間に見せる強氣の術の一つではあつたが、それは馬喰としての本能的な興奮が知らぬ間にやらせる自然なものだつたのである。それは酒の酔とはちがつた一種の陶醉で、その氣持にかあつと全身をまかせてゐなければ、とても客を商談のなかに引き込むことが出

来ないのであつた。はたで思つてゐたよりも、また自分の顔色に出
てゐたよりも準平は本當に興奮してゐたのである。ただ喧嘩の場合
と同じやうに彼はこの状態に慣れつこになつてゐたので、自分の興
奮によつて商賣をぶちこはしにするといふ危険は少しも感じなかつ
た。それどころか、それが必要であることを知つてゐるので、自分
に鞭をあててその中へ追ひ込むのであつた。

そこらに立つてゐる連中を呶鳴りつけておいて彼はその馬の轡を
とつて三軒ほど離れた馬車屋の兼田の所へ行つた。その表に馬車
が一臺置いてあることを彼は來るとき見ておいたのである。兼田の
家の中へ入つて行つた彼は暫くするとその裏手の馬小屋から馬具を
擔ぎ出して、その黒馬に馬車をつけはじめた。彼は身體のなかに、
かつかつと火のやうなものが燃え出したのを感じてゐた。馬具をつ
けるのも、他人の手がそれを勝手にやつつけて行くやうであつた。
瞬く間に支度はできあがつた。彼はまだなにかを捜すやうに近所の
家の軒先を見てゐた。と倉庫の裏手によせかけて桃内石とこの邊で
呼ばれてゐる軟質の石材が二十本ばかりあつた。こいつ折れるかな
と思つたが、すぐ彼はその一本に手をかけて、うんと腰に力を入れ
ると馬車の上へ積んだ。それを次から次と十本積むと、量は小さい
が大部分の重さになつたことが解つた。此處から久保山の庭先にか
けての間には、べんべん草の生えた石だらけの乾場が二十間ほどあつ
たのである。親方が縁先に坐つてゐる外、見てゐた連中は此處まで
準平についてぞろぞろ歩いて來たのや、久保山の垣根にもたれかか
つてゐるのや、中途にぶらついてゐるのや様々であつた。いつの間
にか大分人数が増してゐた。だがまだ準平は馬車のまはりをうろつ
いてゐた。それから兼田の納屋へ入つて行つたが、直徑が二寸ほど
で六尺位の落葉松の丸太と、握り頃の竹の棒を持つて來た。見てゐ
ると彼はその丸太を片側の車の輻の間から石材の隙をとほして他の
車輪の輻の間へ貫いた。つまり車輪をまはらないやうにしたのであ
る。馬は久保山の方を向いてゐた。

準平はそこで「退け」と呶鳴つた。馬の前には誰もゐなかつた
し、後方にゐた者も、ずつと離れた乾場の端にゐたのも、思はず二
三步退いた。はつとしたやうな瞬間であつた。準平は馬車の上に飛
び乗つて手綱を左に引き、右に竹を持つて、「ちよつ、ちよつ」と、
馬を追ふときの重い舌打ちをした。馬は一步出ようとして、車輪が
がたんと喰ひ止められたのを知つて立ち止つた。その途端に準平の
右手の竹棒が馬の尻に力一杯打ち下された。「えいつ」といふ掛け
聲に續いて、厚い肉を叩くばつといふ音がした。馬は前脚を折りま
げた。そのとき第二撃が加へられた。馬は頸を突き出して避けるや
うに首を左右に振つた。前脚が丸い石の上をがりがりと引つ掻い
た。第三撃。馬はあがいた。車輪は廻らぬままで、ぎぎ、ぎぎ、と
石ころの上を引きずり出した。

準平の喉からはなにか叫びのやうなものが飛び出し、狂氣のやう
に續けざまに鞭が打ち下されてゐた。彼はもう無我夢中の境に入つ
てゐた。ただ自分の興奮の中に、無理矢理にしがみつき、馬の呼吸
を本能的に嗅ぎ分け、たじろぐ暇を與へず馬を追ひまぐることに、馬
を自分と同じ熱狂に捲き込むこと、どうしてもかうでも馬を驚地^{おどろ}に垣
根の際まで驅り立てることを考へてゐた。萬一馬の力が餘つてゐる
にしても途中で氣を緩めてはならないのだつた。戲談半分によそ事
として見てゐたものも、この準平の様子が眼に入ると、はつと立ち
竦み身體が痺れたやうになつた。生涯に人間が一度か二度しか見せ
ないやうな精根を盡した表情が準平の顔を隈どつてゐたのである。
操り人形のやうに馬車の上に立つて搖れながら、滅茶苦茶に彼は馬
の背を打ちまくつてゐた。だがそれも馬にはさう應へるものではない
らしく、馬はただ目覺めてきた野性の深い本能にまかせて車のまは
らぬ馬車を引きずつて狂奔してゐるのであつた。たうとう馬は地を
引つ掻き長い鬣^{あし}をふり亂してその乾場の端の垣根のところまで殺到
した。その低い垣を蹴破るやうな勢であつたが、準平がうまくそこ
で馬を止め、彼自身は馬から飛び下りるとその勢で親方の前へ駆け

寄つて噛みつくやうに言ふのであつた。

「見ましたか、親方。見ましたか。どうです。あの桃内石は二百貫からありますぜ。この村にや居ませんよ。これ位の馬あ。準平の見た眼に狂ひはねえんだ。」

「ふうむ」と親方は唸つた。久保山は擲擲つたり、突つばなしたりすることのできない、本氣になつた人間に今向ひ合つてゐることを悟つたのである。さういふ場合にあつさりと相手を通してやらなければ、意外に手を焼くことになるのを、彼は経験上知つてゐた。

「うん、よからう」と親方は呟くやうに言つた。準平は別に嬉しさうな顔もせず、當り前だ、といふ風に、すぐ馬の方へ戻つて、車の輻から丸太を抜き馬を向けかへて兼田の方へ追つて行つた。

久保山は小切手を書かうと思つて、おや受け渡しはまだまだ先のことだ、と氣がつき、その拍子に、この馬は鱈場に使つた後五十か百は儲けて賣り飛ばすつもりで買ふのだ、といふ算盤のとりかたを忘れてゐたのを思ひ出して、ふいと自分の氣持が頼りなくなるのだつた。さう言へば、あれだけの仕事に當つてゐるかも知れないのだつた。準平の芝居に引つかかつたかな、といふ考へを押へつけねばならないやうになつたのは、一週間程たつて準平が人相の悪い見すばらしい風采の男と二人受け渡しのことのでやつて來た時のことであつた。

四

二月に入つてからは時化つづきであつた。鱈網の者は一週間も沖へ出ずに吹雪に閉ぢこめられてゐた。ある朝雪がはれると家々は三尺ほど新しい雪に埋められてうづ高い軒下の雪が屋根まで續いてゐるのであつた。村の者が道路の雪を踏み固めたり、窓の前の雪をとりのけて光線を入れるやうにしたり、妙にみしりみしりと應へる屋根から雪を卸したりしてゐるとき、早見の勘太や準平の組の鱈網

は久しぶりで沖へ出るこゝになつた。日光が白い雪にきらきらと輝いて、表へ出た人々は眞黒い顔でまぶし氣に挨拶を交してゐた。だが晝飯後になつてから、軽くさつさつと軒端の粉雪を吹き落すやうな北風が出、すうつと陽が一度に翳つて行つた。その頃、晝飯がはりの馬鈴薯の鹽煮を爐の自在鉤につるしたまま食べあきたお妙は、垢がびかびか光つた丹前を羽織つてうとうとと爐端で横になつてゐた。どういふものかお妙は準平が留守になると何となくがっかりして急に疲れを覺えるのであつた。準平は氣難しく、それでゐて何でも細かなことに氣がつく質で、見かけによらず非常に神經質なのだ、と彼女はよく人に話してゐた。氣に食はないことがあると、食卓に兩手をかけて引つくり返したり、土足で彼女を蹴倒したりすることがよくあるので、酔つてゐるとゐないとに拘らず準平が家にあるときはお妙は身體中の神經が張りつめてゐるのであつた。それで準平が留守になると彼女は繕ひをするでもなく洗濯をするでもなかつた。何がなし身體中から重荷をとり去られたやうな氣持で近所の女房どもを集めて花をひいたり、無駄話をしたり、でなければ晝寝をしてゐるのだつた。だから準平の家は女どもがよく集つてゐた。酒が残つてゐたりするとお妙は鱈漬を上げて來てそれを肴に女たちと飲んだりするのだつた。

お妙がさうしてうつとりしてゐると、ぎしぎしと表の板戸を軋しませて、準平の乗つてゐる鱈網船の船頭である早見の勘太の嬌のよしのが土間へ入つて來た。むつくりと眠れた顔の、もう四十に近い氣のいいよしのが、どうしたのかひどく慌てた様子であつた。薄目をあけてゐたお妙を眠つてゐるのだと思つてぐいぐいと肩の處をこづいて、

「妙ちや、妙ちや、時化だえ」と言ふのであつた。はつと顔を上げて耳を澄ましたが、風がひゆうと唸つてゐるだけで、さほどの事とも思はれなかつたが、眞北の風になればこの村の濱は船がつけれなくなることは彼女も知つてゐた。開けたままの戸口からは眞白い